

プロジェクト型学習による 海外研修プログラムの充実化への取組

立松 大祐, 玉井 輝之

愛媛大学教育学部

Enhancing Overseas Study Programs through Project-Based Learning

Daisuke TATEMATSU, Teruyuki TAMAI

Faculty of Education, Ehime University

1. はじめに

UWB（ワシントン大学バセル校）ダイバーシティと教育実践研修は、愛媛大学学生海外短期派遣プログラムの一つであり、教育学部の海外教育実践体験実習として実施されるプログラムである。プログラムの目的は、地球的視野に立ち、ダイバーシティを理解・尊重する精神を持ち、多様性を社会の活力に変えていくことのできる人材、また、自国の文化を発信できるグローバルな人材育成である。主な研修内容は立松・玉井（2024）に詳しいが、まず、UWBおよびUW（ワシントン大学シアトル校）、日本などのアジア系移民や先住民等の学術文化施設訪問を通じたダイバーシティ理解のための活動である。次に、シアトル市内でダイバーシティに対応した活動をするNPO団体への訪問や聞き取り、フードバンク等でのボランティア活動である。また、UWなど、地元の小・中・高・大学での教育実践体験と文化交流を行う。

これらのプログラムに参加する学生には、プログラム内容の理解と教育実践体験のため、入念な事前学習や準備が必要である。例えば、ダイバーシティ理解のための施設訪問に際して、学生は施設の設立趣旨や活動内容等について事前に調査を行う。また、小学生を対象にしたワークショップを行うには、児童の発達段階等を鑑みて、活動の内容や進め方など多くのことを考慮して準備するのである。これらの学習において重要な役割を果たすのは参加学生の英語

の力である。

本事例報告では、研修の一部を英語プロジェクト型学習と捉え、プロジェクト型学習の理論的整理を行い、研修におけるプロジェクトのテーマや目標、学習活動の計画と評価を整理し、これからのプログラムの改善と発展について考えたい。

2. プロジェクト型学習

2.1 プロジェクト型学習とは

プロジェクト型学習（Project-Based Learning, 以降PBL）とは、学習者が主体的に課題を探究し、問題解決のための活動を通じて知識や技能を習得する学習方法である。この学習方法の基盤には、教育は単なる知識の伝達ではなく、経験を通じた実践的な活動を通じて学ぶことが重要であると主張するデューイの教育理論がある。デューイの理論を発展させたキルパトリックは、「プロジェクト法」を提唱した。プロジェクト法は学習者が自分の興味や関心に基づいて目標を設定し、それに向けて計画し、実行し、評価するプロセスを通じて学ぶ方法である。PBLを通じて学習者は自主性を持ち、責任感を養い、協働的な問題解決スキルを向上させることができると主張した。

PBLの効果を高めるためには、Keller（2009）の動機づけ理論であるARCSモデルが重要である。ARCSモデルは、学習者の注意（Attention）、関連性（Relevance）、自

信 (Confidence), 満足感 (Satisfaction) を高めることを目的としている。PBLにこのモデルを適用することにより, 学習者は関心を持ちやすい現実的な課題に取り組むことができ, 学習動機が向上し, 学習への関与が深まることが期待される。例えば, 現実世界の問題を解決するためのプロジェクトを通じて, 学習者は自分の学習が社会に与える影響を実感し, 学習に対する自信と満足感を得ることができる。また, 具体的な成果物を通じて, 自分の学習の進捗と成果を確認できるため, 学習に対する満足感が高まると考えられる。これによって学習者の動機づけを維持し, 学びへの積極的な参加を促進することが可能である。さらに, 適切なフィードバックを提供し, 自己効力感を高めることで, 学習者の自信を向上させることが期待できる。

PBLは協同学習の要素が強いと考えられる。協同学習とは, 複数の学習者が共同で課題に取り組み, 互いに助け合いながら学ぶ互恵的な学習方法である (Johnson, Johnson, and Holubec, 2002)。PBLにおいて, 学習者はチームとして協力し, 意見交換や情報共有を通じて, 問題解決に向けた多様な視点やアプローチを探ることが求められる。

Gillies (2016) では, 協同学習が学習者エンゲージメントと学習成果を向上させることが明らかにされている。学習者エンゲージメントは単に学習内容に対する関心だけでなく, 心理的および社会的関与も含まれるとされている。Williams, Mercer and Ryan (2015) は, 学習者が学習プロセスに積極的に関わり, 自己効力感を持つことが重要であると述べている。Mercer and Dörnyei (2020) は, 学習者エンゲージメントを高めるためのPBLの効果を強調している。PBLは意味のある学習経験を提供し, 学習者はコミュニティの一員としてより深く学習に取り組むようになることが期待される。

2.2 英語教育におけるPBL

英語教育の分野においてもPBLが注目されるようになってきている (金森, 2022)。PBLは学習者が実際の課題に取り組む, 実践的なプロジェクトを通じて学ぶことを主眼とする方法である。学習過程において, 言語習得の自然なプロセスを促進し, 学習者の自主性, 協働性, および問題解決能力を高めると考えられている。PBLは, 多くの理論的背景によって支えられている。まず, インプット仮説 (Krashen, 1985) は, 言語習得において大量の理解可能なインプットを継続的に触れることが重要であると主張している。PBLの学習過程において, 学習者がプロジェクトを遂行するために, 必要な情報を収集し理解する過程で大量の英語インプットに触れる機会がある。必要な情報の多くはインターネットや書籍から得られ, それらの多くは学習者の英語レベルを超えるものである。学習者は文章中の前後の文脈やトピックについての背景知識を活用し, 分か

らなかつたものを理解可能なインプットに変えて情報を理解しようとする。この過程は, 言語レベルが調整されている教科書中心の学習では得られない本物の言語使用の機会を提供し, 言語習得を促進することができるかとされている。

アウトプット仮説 (Swain, 2005) では, 言語のアウトプットが言語習得に重要な役割を果たすとされている。学習者は自ら言語を使用する過程で, 言語構造の理解を深め, 正確な表現を身につけることができると主張している。PBLにおいては, プレゼンテーションやディスカッション, レポートやポスター作成など多くのアウトプットの機会が提供され, 学習者は自分の言語使用を試行錯誤しながら修正し, 向上させるプロセスを経験する。アウトプットを通じて, 学習者は自分の言語運用の誤りや不足に気づき, それを修正するための具体的な対策を講じることができるのである。

また, インタラクション仮説 (Long, 2015) によれば, 言語習得は相互作用を通じて促進される。つまり, 学習者は他者とのコミュニケーションを通じて意味を交渉し, フィードバックを受けることで, 言語の理解と使用が深まるのである。PBLは, 学習者の協同学習を奨励するので, 意味交渉やフィードバックの機会が増大する。学習者は共同で問題を解決し, 知識を構築するプロセスを通じて, 言語を実践的に使用しながら学習を進めることになる。

言語を通して他者とつながり, それが個人の発達に寄与すると主張するヴィゴツキーの社会文化理論は, 言語習得の研究にも応用されている (Lantolf, 2000)。PBLでは, 学習者が共同でPBLに取り組むことを通じて, 他者からの支援を受け, より高いレベルの言語能力を達成する機会の提供が期待される。このプロセスは, 学習は個人の努力だけでなく, 社会的な文脈や関係性によって支えられることを意味している。例えば, 学習者がペアやグループで学習する際, 互いに助け合い, 補完し合いながら進める。ここでは, より経験豊富な学習者が最近接発達領域にいる他の学習者を支援し, 支援を受けた者は徐々に自立していくことができるのである。

これらの理論は, PBLが学習者の関与を高め, 言語習得を効果的に促進するための理論的基盤を提供している。UWBダイバーシティと教育実践研修にPBLを取り入れることで, 学生はより積極的に事前学習に取り組む, 実践的な英語コミュニケーション能力を身に付けることが期待される。

3. UWBダイバーシティと教育実践研修におけるPBLの事例

「1. はじめに」で述べたプログラムの目的を達成するためにプロジェクトの目標として, 次の3点を設定した。

- (1) 英語コミュニケーション能力の育成

英語を使って情報を収集し、整理し、発表する能力を養うことであり、研修中に英語を使って意見を述べたり、質問したりする能力を向上させる力を身に付ける。

(2) 思考力、判断力、表現力等の育成

情報を分析し、評価することで自分の意見を形成する力を養うとともに、課題解決に向けて計画を立て、実行する力を高める。

(3) 学びに向かう態度の育成

協同学習を通じて、他者との協力の大切さを学び、プロジェクト活動を通じて、自己管理能力や責任感を高める。

次に、プロジェクトの概要について説明する。プロジェクトは、ダイバーシティ研修のための事前学習と教育実践体験学習の2つに大別することができる。学習会は10月から毎週1回（基本的に月曜日の1限帯）の頻度で開催し、ダイバーシティ研修については基本的には個人で学習した内容をプレゼンテーションする方法を進めた。一方、教育実践体験学習は、テーマごとに研修参加学生をグループに割り振り、グループでワークショップ等の内容を検討する方法を進めた。

学習者エンゲージメントを育成するには、いかに自分自身が準備に関わるのかが肝要である。Dörnyei (2001) は、言語学習における動機づけがパフォーマンスと成功に影響することを指摘している。PBLを行うことは、学習者が自分の学習プロセスに積極的に関与し、内発的動機づけを高めるために効果的であると考えられる。

3.1 ダイバーシティ研修の事前学習

シアトルに赴き、現地の担当者から各プログラム内容の説明を聞き、なんとなく分かった気がするような、または、分からなくてもそのままにしておくような消極的参加では、プログラムの目的を達成することはできない。自ら積極的に参画するためには、事前にプログラムの内容をある程度英語を通して理解した上で、現地の話題提供者との質疑応答などのやり取りができるよう準備が必要である。そこで、学生にはプログラムの内容について調べ学習を求め、そのプレゼンテーションと質疑応答を通して学習者エンゲージメントを促した。

学生は、各プログラムの内容について英語のウェブサイトなどを中心に学習をし、それぞれの概要や要点を整理して15分程度で他の学生に説明と質疑応答を行った。一度の学習会で2つから4つのプログラム内容を紹介できるよう計画した。10月に事前学習の内容と方法について説明し、11月後半から発表する予定にした。ダイバーシティの内容に加えて、滞在地であるシアトル、訪問予定の各種学校についても含んだ。学生には内容を自主的に選択させた。表1は、2023年度に実施した事前学習スケジュールである。

表1 ダイバーシティ事前学習スケジュール

学習会日付	プログラム
第6回 2023年 11月20日	-Seattle -Foundation for International Understanding Through Students (FIUTS)
第7回 2023年 11月27日	-University of Washington, Seattle -University of Washington, Bothell -OneWorld Now!
第8回 2023年 12月4日	-Bainbridge Island Historical Museum and Japanese-American Exclusion Memorial -Wing Luke Museum
第9回 2023年 12月11日	-Committee for Children -Q Center
第10回 2024年 1月15日	-TOPS K-8 School (choice school) -Soundview Elementary (IB School) -Thornton Elementary -Decatur Elementary (accelerated learning)
第11回 2024年 1月22日	-Ingraham High School (IB School) -Food Lifeline -Vera Project -Work ED

図1は、UWのQ Centerを担当した学生が作成したプレゼンテーション資料の一部である（全17枚中の2枚）。この資料は、Q Centerの名称の意味と目的を述べており、その後、オールジェンダートイレ、研修で出会うスタッフ、センターが提供するサービスとプログラム（無料HIV検査、図書室、ラベンダー卒業式など）、センターのFAQの概要、YouTube動画やインスタグラムの紹介を載せて作成されている。担当学生は本資料に基づきQ Centerについて他の学生に説明を行い、施設や活動の概要について理解を促すことができた。

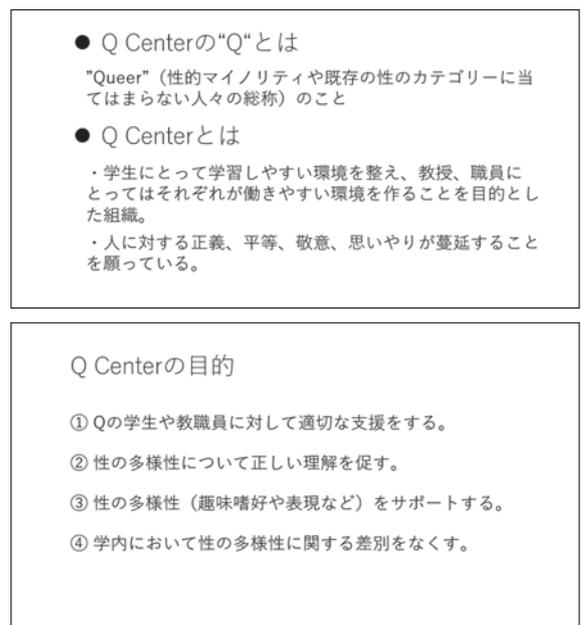


図1 Q Center についての発表資料（一部）

この例と同様に、各学生は自分の担当するプログラムについて資料を作成し、学習会でプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションの資料はMicrosoft Teamsに保存し、希望する学生はいつでも資料を参照し学び直しをできるようにした。

プログラムで関わるNPO団体は、シアトルにおけるダイバーシティを尊重し、違いを社会の活力にすべく活動している。Keller (2009) のARCSモデルにおける「関連性」の要素は、学びが実生活や将来の目標に関連していると感じることで、学生の学習へのエンゲージメントを高めるとしている。したがって、現実の社会の問題や課題に基づいたプログラム内容を調査し、情報を整理し、他の学生にそれらを伝えるといったPBLをする学生は、学習活動を通じて関連性を高め、より意味のある学習経験をすると考えられる。

3.2 教育実践体験学習

教育実践体験学習とは、研修中に訪問する各学校で行うプレゼンテーションやワークショップのことである。2023年度、UWの日本語クラスを訪問した際には、「松山紹介」と「俳句ワークショップ」を行い、小中高等学校訪問時には提供されたクラスと活動時間に合わせ、「松山紹介」「愛媛の小学校生活」「折り紙ワークショップ」を組み合わせた。プレゼンテーションとワークショップを児童生徒、学生を相手に行うプロジェクトには、事前に次の事柄を考慮する必要があった。

まずは、目標の明確化である。プロジェクトの最終的な成果物や達成目標を明確にした。例えば、プレゼンテーション、ワークショップ、レポート、ポスターなどが成果物として考えられるが、現地の児童生徒、学生とできるだけ相互作用のある活動にすべく、プレゼンテーションとワークショップを行うことにした。英語のスキルは、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの向上が目標である。成果物を作成する際の調査や発表原稿づくり、練習とリハーサル、実際の教育実践体験学習での発表ややり取りを通して、英語を統合的に使うことになるからである。

次に、プロジェクトのテーマを考えることである。Keller (2009) が指摘するとおり、現実の社会や日常生活との関連があれば、学生はより興味を持って主体的に取り組むことができると考えた。本研修では、国際交流、日本文化の発信と交流を通じたグローバル人材の育成を目的にし、「松山紹介」「愛媛の小学校生活」「俳句ワークショップ」「折り紙ワークショップ」を設定した。「松山紹介」には、松山市の概要や愛媛大学の概要説明を含めた。また、学生の多くは教員志望であることから小学校生活の紹介をすることで、シアトルの小学校との相違点を明らかにできると考えた。俳句は愛媛県の文化の一つであり、アメリカを始め海外においても高く評価されており、英語俳句づくりが

行われている学校もあることから、ワークショップとして取り組むようにした。折り紙は代表的な日本文化の一つであり、単純な折り紙ならば現地の児童と一緒に楽しんで作ることができる。

学習形態について、ダイバーシティ研修の学習は個人での調査と発表を主とし、教育実践体験学習は、グループとした。グループでは学生は協力して学習することが求められ、研修出発前に学生間のコミュニケーションの深まりとチームワークを養うことができ、それによって学習意欲と成果を高めることができると考えた。

2023年度の計画では、第2回目(10月16日)の学習会において、参加学生11人に対して松山市紹介を考えるグループに3人の学生を、愛媛大学の紹介には4人、俳句紹介には4人を充てた。また、俳句ワークショップの内容と方法を考案するグループに2人、折り紙ワークショップに3人を配置して、12月中の完成を目指して活動するよう促した。2024年3月初旬に渡航する予定を考えると、1月から準備内容の調整と練習及びリハーサルを始める必要があるからである。さらに、第3回目(10月23日)の学習会では、小学校生活紹介のワークショップを作成するグループとして、リーダーを3人、清掃活動の一部をダンスにして紹介する企画として2人、パワーポイント資料に活用する学校の写真撮影に1人、書道を披露する2人を配置した。このように、学生は複数のグループに所属して1人で複数の役割を担当することになり、協力してプロジェクトを進めることが必須となった。

Deci & Ryan (1985) によると、自律性、能力感、関係性が学習動機を高める。つまり、学習者が自律的に行動できる環境が整うと、内発的動機が高まり、学習に対する積極的な態度が生まれるのである。本研修のPBLでは、学生はグループで学習計画やICT機器の活用などの学習方法を考え、互いに進捗状況を確認合いながら学習することができる。これにより、学生は自己効力感を持ち、学習に対する内発的動機も高まることが期待される。

これらのことを踏まえて、学生は成果発表をする2024年3月の研修に向けてPBLに取り組んだ。2024年1月からの学習会では、各グループによる練習とリハーサルが始まる。プロジェクトの進行中に学生同士による継続的で適切なフィードバックの機会をつくり、感想や学んだことを共有することは、それまでの努力と達成度を互いに評価し、より深い学びを促すことになる。例えば、「折り紙ワークショップ」では現地の児童と何を折るのかを決定することが重要である。学生は幼少期から折り紙に慣れ親しんでいるため、少し複雑な折り方が必要になる「ウサギ」なども、児童は簡単に折れるものと想定することがある。しかしながら、事前学習において他の学生を児童に見立て、実際に英語で折り方を説明してみると、工程が多く複雑なのは時間がかかり、低学年の児童を対象にした場合は、よ

り簡単に折れるものから導入するという判断ができるのである。次に、それぞれの学習の成果物の概要を紹介する。

3.2.1 松山紹介

このグループの学生は、松山市を紹介するパワーポイント資料(図2)と動画(図3)を作成した。パワーポイント資料は全23枚で構成されており、最初は日本地図を示して、面積や島の数などをアメリカと対比しながら紹介し、食べ物や着物、アニメなどの日本文化に触れてから、松山市の紹介(特産物、市内電車、坊っちゃん列車など)を行い、動画の視聴に導く構成とした。

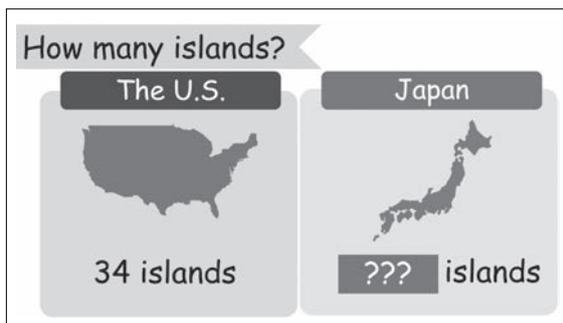


図2 松山紹介資料(一部)



図3 松山市の紹介ビデオ(一部)

これらの資料は、単に説明するのではなく、図2から分かるように、クイズを交えて児童生徒・学生の反応の確認と意見のやり取りができるように作られている。学生は、パワーポイント資料を英語で説明するためのスクリプトの作成も行っている。これは、過去の研修の経験では、訪問した学校の要請により想定したクラス数以上で同時にプレゼンテーションをするという事態があり、それに対応するためである。つまり、資料作成を担当したグループの学生だけでなく、すべての参加学生が英語でのプレゼンテーションをできるようにするためである。例えば、図2のスライドには、「Japan has a lot of islands. Can you guess how many islands there are in Japan? The answer is about 14,000!」という簡単なセリフが添えられている。

動画では、学生がガイドとして登場し、松山空港、路面電車、観覧車、松山城、道後温泉、特徴のあるお菓子などを英語で紹介している。動画の長さは4分未満で、英語も

明瞭に発音され、図3のとおり字幕も適切に配置されているので、大変理解しやすい内容となっている。

3.2.2 愛媛の小学校生活

ワシントン州日米協会は、日本の小学生の1日の生活をシアトルの児童生徒に伝える「Japan in a Suitcase」というプログラムを製作している(<https://www.japan-in-schools.org/j-japan-in-a-suitcase>)。その中には、「たろう小学生向け」という小学3年生の児童を主人公にした作品がある。愛媛の小学生の学校生活を紹介するグループは、その内容を参考にして「こんにちは」「いただきます」「ごちそうさまでした」という日本語のあいさつから始まる愛媛の小学校を題材にしたパワーポイント資料を22枚作成した。図4はその一部である。朝の集団登校、制服、黄色の帽子、ランドセル、朝の読書、朝の会、授業などが説明されている。習字などの学習に加えて、給食や清掃、集団下校など特徴的な活動が含まれている。

DAILY SCHEDULE	
Morning Reading Time	8:00~8:15
Morning Homeroom	8:15~8:25
1st Period	8:25~9:10
2nd Period	9:20~10:05
3rd Period	10:25~11:10
4th Period	11:20~12:05
Lunch Time	12:05~12:50
Recess	12:50~13:15
Cleaning Time	13:15~13:30
5th Period	13:40~14:25
6th Period	14:35~15:20



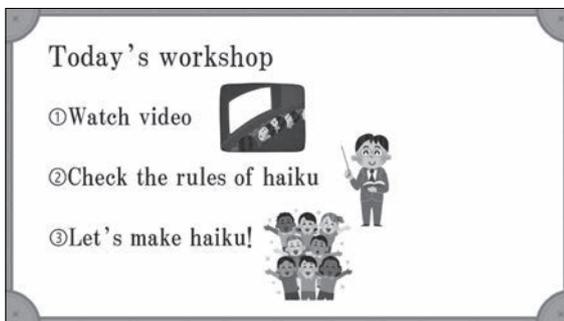
図4 小学校生活紹介資料(一部)

特に、シアトルの学校には児童による清掃の時間はないため、発表には印象に残るように工夫を加えた。学生はほうきやモップを使って清掃する動きのダンスを製作したのである。前年度の研修において同様のことを試したところ、児童も教員も学生と一緒に踊り、大好評であった。ダンスの曲は、大人気アニメである『怪盗グルーのミニオン危機一発』で使われた Pharrell Williams の「Happy」である。やはり、児童は身体を動かしながら話を聞く方が、より積極的に参加できるのである。学生がダンスをマスターするため、学生2人が中心になってチュートリアル動画(30秒)を作成した。それを Microsoft Teams に保存し、

他の学生が児童の前で自信をもってダンス練習ができるよう準備した。

3.2.3 俳句ワークショップ

俳句ワークショップは、UWの日本語クラスの学生といくつかの学校の児童生徒を対象に実施することを想定して準備を始めた。UWの学生には、日本語での俳句づくりを、その他の児童生徒には英語でできるように、パワーポイント資料(17枚)と動画(約4分)をハイブリッドで活用できるように作成している。動画には、俳句づくりの基本的なルールや、代表的な俳句の英語訳、学生自作の俳句(日本語と英語)などを含め、学生や生徒が俳句づくりに参加しやすい工夫がされている。特に、俳句に親しみのない児童生徒・学生に対して、説明内容が伝わりやすくなるように、すべてに英語字幕をつけている。



Q. How many syllables are in a haiku?

- ① 5 - 5 - 5
- ② 7 - 5 - 7
- ③ 5 - 7 - 5

図5 俳句ワークショップ資料(一部)

図5は、パワーポイント資料の一部である。動画の内容を踏まえて、俳句は17音節であることや、季語を含むことなどの俳句づくりのルールの概要についてクイズ形式を交えて示している。本ワークショップにおいても、他のプレゼンテーションなどと同様に、参加する学生・児童生徒が数グループに分かれてもワークショップの対応ができるよう、各資料には英語のセリフをつけている。また、ワークショップでは、児童・生徒、学生と一緒に俳句を作り、それを作品にするため筆ペンと短冊を準備した。3月に実施予定なので、桜などが入る写真とその場面を詠んだ俳句を例として示し、季節を春に絞る児童生徒、学生が俳句のイメージを作りやすいように配慮をしている。

3.2.4 折り紙ワークショップ

折り紙は「Origami Club」がある高校があるなど、児童生徒からの人気も高い。担当の学生は、児童生徒の発達段階を踏まえて何を折ることが適切であるか、ワークショップでの製作時間と折りの工程を他の学生との意見交換から決定している。図6は児童生徒に折り紙の導入と折り方を説明するための動画の一部である。

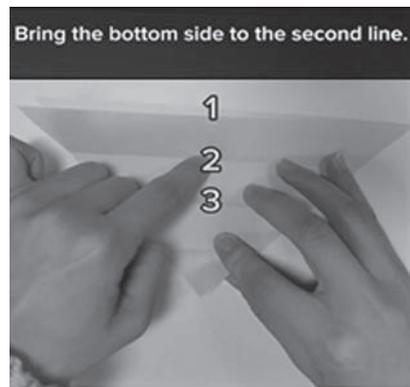


図6 折り紙ワークショップ動画(一部)

動画には手裏剣、兜、ウサギ、卵の他に紙風船の折り方も準備され、児童生徒の発達段階や興味関心に合わせるようにしている。特に、渡航する3月は、アメリカのイースター(復活祭)が近づく頃であり、ウサギと卵は生命の再生や豊穡を象徴するシンボルであることから含むようにしている。他のプレゼンテーション、ワークショップと同様に、英語字幕をつけることで分かりやすさを追求している。同時に、ワークショップ会場の学校の都合により、学生は同時間にいくつのグループに分かれるか不明の場合もあるため、学生は事前にどの折り紙も説明できるよう練習はするものの、現地では動画と英語字幕があることで英語による説明が容易になるという効果もある。

ワークショップでは、学生はそれぞれのペースで折り紙を折る児童生徒を支援する。折り紙に慣れ親しみ得意に感じている児童生徒には、複雑な「つる」などに挑戦することもある。学生は準備段階で練習した英語表現を軸に、自分が使える英語表現を駆使して実際に手元を見せながら児童生徒を支援し、コミュニケーションを楽しんだ。学生はワークショップ準備と並行して、各学校へのお土産として

大量の折り紙作品を持参している。児童生徒にプレゼントすると大変喜ばれ、用意した折り紙や用紙が不足する事態が生じるほどであった。

4. PBL の成果と課題

学習会を終えたタイミングで、「事前学習を通して身に付いた、または伸ばすことができたと考える教師としての資質・能力を答えて下さい。」の質問を記述式で回答させた。本研修の目的を達成するためのプロジェクトの目標に関する記述回答の一部を示す。(1)英語コミュニケーション能力の育成に関しては、「英語に対する興味関心の部分が更に増えたと思う。興味関心を持っていることは学習意欲にもつながり、とても大切なことなので興味関心で終わらせず、どんどんもっと英語を深めて、英語でのコミュニケーションをするだけでなく、視野を広げることに活かしたい。」「PowerPoint や、ワークショップのための動画を作ることを通して、相手に情報をわかりやすく提示する能力が身についた。」という意見が挙げられた。

(2)思考力、判断力、表現力等の育成に関して、「特に折り紙ワークショップではどのような手順が訪問先の児童生徒にとって理解しやすく興味を持ってもらいやすいかなど協力して検討することができた。」「見通しを持って活動を行う力がついたように思う。ワークショップ本番に向けて今週どこまで仕上げるべきかということを中心に考えることができた。」という意見が挙げられるなど、計画を立て実行する力を高めることができた。

(3)学びに向かう態度の育成に関しては、「チームで協力してワークショップの準備を行う中で、コミュニケーション能力を高めることが出来た。」「ワークショップの準備を通して他のメンバーと協力する力を向上させることができた。」「他学年の方との交流により、コミュニケーション能力、他者理解の力も伸ばすことができた。」という意見があり、自己管理能力や責任感の高まりを確認できた。学生はダイバーシティ研修のための事前学習と教育実践体験学習の準備という PBL を肯定的に捉えることができおり、自己効力感を高められていると考えられる。

シアトルでの滞在中、学生は、Microsoft Forms で作成した活動記録表に毎日の研修の学びについての振り返りを行った。教育実践体験学習を行った際の達成度の自己評価を表2に示す。

表2 研修目的への到達度の自己評価 (n=11)

研修目的に関すること	達成できた	やや達成できた	あまり達成できなかった	達成できなかった
研修2日目 UW (Japanese classes)	3人	6人	2人	0人
研修3日目 Ingraham High School	6人	5人	0人	0人
研修8日目 Thornton elementary	9人	2人	0人	0人
研修9日目 TOPS K-8 School	8人	3人	0人	0人
研修11日目 Soundview Elementary	7人	4人	0人	0人

研修2日目の UW (Japanese classes) での「松山紹介」と「俳句ワークショップ」についての振り返りでは、2人が「あまり達成できなかった」と回答した。自由記述からは、「(自分の担当箇所の) 原稿を覚えきれていないところがあった」ということが評価理由であったことが分かった。研修3日目以降の「松山紹介」「愛媛の小学校生活」「折り紙ワークショップ」についての振り返りは、すべての学生が肯定的な回答であった。これらから、教育実践体験学習プロジェクトについては、事前学習から発表まで計画的に実行することができたと考えられる。また、調査、話し合い、発表など、さまざまな場面で英語を使用する機会を増やし、教育実践体験学習の回数を重ねることで、英語を使って発表したり質問をしたりすることを肯定的に捉えられるようになったと考えられる。

PBL の実践にはいくつかの課題も見られる。まずは、ファシリテーターとして学生の学習を支援する教員の役割の変化である。これまでの研修の経験から、学生は事前学習において自分自身が調べ学習を担当したプログラムについては、説明で使われる語彙や表現に覚えがあるため内容理解が進むこともあり、特に関心を示して積極的に質問や発言をする場面が確認されている。つまり、教員が「教える」部分も必要であるが、それ以上に学生が課題について能動的に自分ごととして「考えて行動する」場面を多く作ることが学習の成功には必要であると考えられる。教員は PBL の理念や実践方法について理解し、対話的で協働的な学習をデザインして適切に支援できるスキルを身に付ける必要があるだろう。次に、評価方法である。これまで教員による観察や学生の振り返りとアンケートを主としていたが、プロジェクトのプロセスや成果物を相互に評価し、学生の多面的な成長を捉えるためには、e-ポートフォリオやルーブリックなど、多様な方法を導入する必要があるだろう。さらに、PBL は長期的なプロジェクトになり、十分な学習時間の確保が必要である。本研修においては、プロジェクトの完成期日を示した後、週に1回程度の定期

的な学習以外は学生グループの自主性を尊重していたが、より十分な時間等の確保が必要であろう。

5. まとめ

PBLを研修に取り入れることで、学生はより積極的に学習に取り組み、研修内容の理解の促進と実践的なコミュニケーション能力を身に付けることができる。研修内容の事前学習においては、他の参加学生に説明をするために情報の分析や評価を加えて自分ごととして取り組むことができた。また、現地の学校でのプレゼンテーションとワークショップ準備ではグループでのPBLを通して他者との協力を大切に、自己管理能力や責任感を高めることができた。学生がプレゼンテーションとワークショップを一度きりではなく複数回にわたり行うことは、認知的負荷が下がり心理的余裕を生み出すことになる。その結果として、英語を話す際の流暢さと音声的・文法的正確さが増し、聞き手にとっての理解しやすさが高まる効果がある。それと同時に、双方向のコミュニケーションが生まれやすい状態をつくることができる。

PBLが学習者の自主性や協同学習を促進し、深い学習体験を実現できることが分かった。これにより、学生は将来のキャリアや社会生活において必要となるスキルを効果的に習得し、グローバルな社会で活躍するための基盤を築くことができるであろう。しかし、その実践には研修を企画し学習をデザインする教員の役割の変化、評価方法の工夫、時間などの資源の確保といった課題も明らかになった。これらの課題への対処方法を考え、効果的にPBLを導入することで、UWBダイバーシティと教育実践研修の質的向上を図りたい。

謝辞

本事例報告の一部は、国立大学法人愛媛大学学生海外短期派遣・受入プログラム支援事業、2024年度学部長裁量経費（教育学部における教育改革・教育改善への研究助成）の助成を受けた。研修に参加の学生、プログラムを支援してくださるワシントン大学及びNPO団体のみなさまに謝意を表します。

引用文献

- 金森強（編著）（2022）.『教室から世界へ羽ばたく英語プロジェクト型学習』教育出版
- 立松大祐・玉井輝之（2024）.「コロナ禍における学生海外派遣プログラムの事例報告—ICT活用で拓く持続可能でウェルビーイングな国際交流—」『大学教育実践ジャーナル』23, 49-60.
- Byram, M. (2008). *From foreign language education to education for intercultural citizenship: Essays and reflections.*

Multilingual Matters.

- Deci, E. L. & Ryan, R. M. (1985). *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior.* Plenum Press.
- Dörnyei, Z. (2001). *Motivational strategies in the language classroom.* Cambridge University Press.
- Gillies, R. M. (2016). Cooperative learning: Review of research and practice. *Australian Journal of Teacher Education*, 41(3), 39-54.
- Johnson, D. W., Johnson, R. T. & Holubec, E. J. (2002). *Circles of learning: Cooperation in the classroom* (5th. edition). Interaction Book Company. 石田裕久・梅原巳代子（訳）2010（改訂新版）学習の輪—学び合いの協同教育入門—二瓶社
- Keller, J. M. (2009). *Motivational design for learning and performance: The ARCS model approach.* Springer. 鈴木克明（監訳）2010 学習意欲をデザインする—ARCSモデルによるインストラクショナルデザイン— 北大路書房
- Krashen, S. D. (1985). *The input hypothesis: Issues and implications.* Longman.
- Lantolf, J. P. (Ed.) (2000). *Sociocultural theory and second language learning.* Oxford University Press.
- Long, M. (2015). *Second language acquisition and task-based language teaching.* Wiley-Blackwell.
- Mercer, S. & Dörnyei, Z. (2020). *Engaging language learners in contemporary classrooms.* Cambridge University Press.
- Swain, M. (2005). The output hypothesis: Theory and research. In E. Hinkel (Ed.), *Handbook of research in second language teaching and learning* (pp. 471-483). Lawrence Erlbaum.
- Williams, M., Mercer, S. & Ryan, S. (2015). *Exploring psychology in language learning and teaching.* Oxford University Press.